

生き甲斐といふ事

福田恆存



き甲斐といふ事

福田恆存

新潮社版

生き甲斐といふ事こと

昭和四十六年六月二十日 印刷
昭和四十六年六月二十五日 發行

著者 福田恆存ふくただつねあり 定價 五八〇圓

發行者 佐藤亮一
發行所 株式會社新潮社

郵便番號 一六二
東京都新宿區矢來町七一
電話東京云局一一二六代
振替 東京八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

印刷・二光印刷株式會社 製本・大口製本所

© Tsuneari Fukuda Printed in Japan 1971

目

次

I

〇	生き甲斐といふ事……………	九
〇	續・生き甲斐といふ事……………	二七
〇	知識人とは何か……………	三三
〇	非人間的な、餘りに非人間的な……………	四四
〇	弱者天國……………	五二
〇	眞の自由について……………	五九
〇	勇氣ある言葉……………	六三
〇	偽善と感傷の國……………	六五

世界の孤兒・日本……………八二

滅びゆく日本……………八五

教育の普及は浮薄の普及なり……………八九

「世代の斷絶」といふ事……………三三

「人間國寶」序……………三三

ずばり一言……………一六

II

反近代について……………一六三

聞き手 香山健一 輔仁会雑誌編集部

文学を語る……………101

聞き手 秋山 駿

文学を疑ふ……………136

自己は何處かに隠さねばならぬ……………138

『藪の中』について……………162

フィクションといふ事……………175

唯一語の爲に……………190

後記……………224

生き甲斐といふ事

I

生き甲斐といふ事

——利己心のすすめ

一

生き甲斐とは生ける標^{しるし}であり、生ける證^{あかし}であり、また生の充實感である。それが今日何處にも無いばかりか、それを探し求める手掛すら何處にも見附からぬといふ事に、人々は漸^{やうや}く氣附き始めた様である。少くともさういふ心理が一種の不安感として社會の底流に潛^{ひそ}んでゐる様に思はれる。その原因は大雜把^{おほざつぱ}に分けて、次の三現象に分けられる。

- (一) 戰爭に對する罪惡感の消滅
- (二) 進歩主義の挫折
- (三) 大衆社會の出現

大方の日本人は大東亞戰爭の敗北によつて「醜^{みにく}の御楯^{みたて}」としての生ける標^{しるし}を失つた。が、それを失ふより早く手に入れた生き甲斐は戰爭犯罪に對する懺悔^{ざんげ}の心であり、贖罪意識^{しよくざい}である。その

爲に實際何をしたかは、日本人の場合、殆ど問題にならない。生き甲斐の如き本質的な事柄において日本人の關心を引くのは、常に心懸であつて行爲ではなく、意であつて形ではない。「醜の御楯」として實際にどう振舞ひ、どういふ効果を發揮したかを殆ど問題にする必要が無かつた様に、戦争に對する罪惡感が實際にどういふ形を採つて現れたかといふ事も殆ど問題にする必要は無い。必要なのは心の據り處であり、それはすべて平和憲法に預けた恰好になつてゐた。これは二重の皮肉である。第一に、罪惡感といふ消極的な概念に生き甲斐を求めた事であり、第二に、それを積極的な誇りに轉用した事である。が、この生き甲斐としての罪惡感は戦後に生れた人達や物心附かぬうちに戦争が終つてゐた人達が成人になつた頃から、詰り今から十年位前から次第に效力を失ひ始めてゐたのである。

進歩主義の挫折感も大體それと時期を同じくしてゐる。戦争に對する罪惡感と、それを生き甲斐とする事を國民に教へたのが、他ならぬこの進歩主義であるが、それは更に相手の弱味に附け込んで、單なる罪惡感といふ消極概念ではなく、歐米先進國を手本とする民主主義、共產主義の様な積極的な價值觀を國民に強要した。だが、それらはいづれも永續きはしなかつた。なぜなら、共產主義は非合法と武力革命とを前提として始めて生き甲斐の對象としての魅力ある積極概念たり得るものであつて、議會主義の寛容に飼ひ馴されてしまつては、戦術の變り身に時を稼ぐ自己欺瞞の温室と化する他は無いからである。そればかりではない、共產主義の二大モデル國家であるソ聯と中共が數々の過失を犯して今では相互に反目してさへゐる。更に、共產主義者とはでは言へなくとも、歐米を範として日本國民を鞭打つて來た進歩主義者達の挫折感は大い。

先づ第一に、敗戦直後、民主主義の理想國として、祀り上げたアメリカを、彼等は次第に帝國主

義國として取扱はねばならなくなつたからである。それは反米、反安保、反戦の形を採つて現れたが、この「反」といふ概念は常にさうであるが、いづれも積極概念としての魅力を持たない。それは民主主義ほどにも魅力を持たない。

そこで彼等が想ひ到り、縋り附いたのが民族主義といふ概念である。反米の爲の反米ではない、日本民族の爲の反米である、さういふ風に自他を納得させようとした。が、それは同時に、進歩主義とは全く反對の極に、所謂右派反動勢力の側に、また別の民族主義を目醒ませるに至つた。それと一線を劃す爲には、進歩主義が進歩主義的である限り、それは飽くまで西洋的なものを基準とせねばならず、民主主義といふ概念に忠實でなければならぬ。さういふ西洋的民主主義のモデルとして、人々は次々に英國労働黨、ネルー、ナセル等々に據り處を求め、そして次々に期待を裏切られた。いや、その揚句に想ひ到つた民族主義であつたればこそ、西洋と民主主義の枠内から逃れる事が出来ない。が、西洋と民主主義を土臺にした民族主義が積極的な魅力を持ち得る筈は無い。左右を問はず、國民が心情的に民族主義に傾きを見せ始めたのは戦後二十數年に亘る拜外的進歩主義に倦み疲れたからである。

平和や民主主義が生きて甲斐とは考へられなくなり、それが單なる消極概念に過ぎぬ事を更に曝露したのは、大衆社會、繁榮社會、あるいは高度に工業化された社會の到來である。元來私はかういふ流行語を好まない。それを敢へて用ゐたのは、さういふ言葉の無内容である事を後で證明する爲である。いや、後に限らぬ、今でもそれを仄す事は出来る。マス・プロ教育と輕蔑し、それを不満に思ひながら、わざわざそれを受けようとして大學に這入つて來た學生と同じ様に、人は大衆社會の劃一化、繁榮社會の空虚感、高度に工業化された社會の疎外感に不安を感じると

言ひながら、結構それを楽しんでゐるのではないか。マス・プロ教育といふ言葉が學生自らの發明したものではないのと同様、大衆社會、繁榮社會、高度の工業化も、またそれに伴ふ劃一化、空虚感、疎外感も、國民や大衆が發明したものではないのではないか。國民や大衆の心理や感情は無定型のものである。それを言葉といふ溝によつて一定の方向に流す事ほど易しい事は無い。

が、それは解釋に過ぎず説明に過ぎない。戦争に對する罪惡感も進歩主義も似て非なる生き甲斐であるとするれば、その生き甲斐の似せ物である事を曝露した高度に工業化された繁榮せる大衆社會における人間の劃一化、空虚感、疎外感といふのも同じく似せ物ではないか。それは、自己欺瞞としての生き甲斐を全く失つたといふ自己欺瞞に過ぎまい。さうなると、劃一化、空虚感、疎外感の不安を絶えず口にしながら、それに縋つて生き、それを生き甲斐とする人々が生じかねない。嘗てさういふ事があつた。ロシア帝制末期のインテリゲンツィアは自ら餘計者と稱し、優越感の上に胡座あぐらを掻いた劣等意識に特權的な生き甲斐を見出してゐた。それを悲劇と喜劇の左右兩翼から粉碎したのがドストイェフスキーとチェーホフである。餘計者の概念は日本にも輸入された。が、その偽善と感傷を粉碎する思想の基盤はこの國では甚だ脆弱ぜいじやくである。

二

私は人々が生き甲斐と呼ぶに足るものを見失ひ、その事について不安を懷き始めてゐるといふ事實を否定しはしない。ただ問題なのは、その不安に漸く今になつて氣附き始めた事であり、それまでは右に述べた様に似て非なる生き甲斐によつて自分を欺いて來た事である。とすれば、今

日、漸く氣附き始めた生き甲斐無き事についての不安感もまた自己欺瞞に終りはしないか。似て非なる生き甲斐とは眞に生き甲斐と呼ぶに足りぬものの事であり、さういふ消極概念を恰も積極概念であるかの様に錯覺し轉用する事に掛けては、日本人ほど器用な民族は他に無い。下世話に言へば、「鰯の頭も信心」といふ事になるが、それはたとへ鰯の頭にもせよ、何處かに生き甲斐のよすがを求めずにはゐられぬ弱き心の現れであり、同時に生き甲斐のよすがとしてなら鰯の頭でも満足する欲の無さの現れでもある。この弱さと欲の無さとは日本民族固有の特性か、或は江戸時代、乃至は明治時代からの慣習か、それは暫く問はぬ事にする。問題はその特徴を長所と見るか短所と見るかにあらうが、少くとも現代に關する限り、私はそれを短所と見る。弱さと欲の無さとは一口に言へば利己心の缺如といふ事になるが、現代の日本人はこの利己心といふ「臭い物」の存在を自分の内に見出す事を恐れて、それを隠す「蓋」として到る處に鰯の頭を探し求める。どんな小さな「蓋」でも、紗の様に透けて見える「蓋」でも構はない、「蓋」の役を果さぬ「蓋」らしき代用品で満足する。それほどに中身の利己心が小さいのか、或はそれほどに利己心に對する恐怖心が大きいのか。恐らく兩方であらう。人とは極く些細な利己心に對しても、その葉ひばえに對してすら、無意識のうちに後めたさを感じる様に飼ひ馴されてゐるかに見える。

これは歐米人は勿論、他のアジア、アフリカの諸民族においても殆ど見受けられぬ心情である。日常茶飯の例を幾つか挙げよう。彼等は立身出世主義を決して後めたいとは思つてゐない。彼等は小金を貯めて老後を安樂に暮す事に汲々としてゐる事を後めたいとは決して思つてゐない。彼等は私有財産を飽くまで守り、その事自體に少しも後めたさを感じてはゐない。彼等は世襲財産の譲渡、繼承に、またそれを可能にし、それによつて成り立つ家庭、及び家庭的満足に何の後め

たさも感じてはゐない。彼等はさういふ自分達の「小市民的」利己心を保護し保證するのが國家だと考へてゐると同時にそれらの利己心が相互にぶつかり合つた時に、その紛争を調停し管理するのもまた國家だと考へてゐる。随つて國家權力を惡と見做す考へ方は一般的ではない。

さう言へば、日本でも同じ事だと言ふ人がゐるかも知れない。日本でも大部分の人間が私有財産を大事に守り、老後を安樂に暮す事を念願としてゐる。が、さういふ「小市民的」利己心を否定する「思想」に對しては殆ど防備力を持たない。國家、社會、階級、公共の福祉、ヒューマニズムなどの大義名分に對して、常に後めたさを感じてゐる。それ處か、戦後の風潮の中で育つた青年が結婚して家庭を持ち、日曜日など子供連れて温泉場に出掛ける時、未だに「家庭サーヴィス」などといふ言葉を用ゐ、「爐邊の幸福」に多少の後めたさを示す。英佛の十八九世紀の文學と明治以後の日本の近代文學とを比較して見るが良い。英佛においては、その優れた小説の殆どすべてが家庭小説であり、それも富裕階級、貴族階級を材料としたものであるのに反して、日本の近代文學の主流は自然主義からプロレタリア文學に至るまで貧者の文學であり、貧者、敗北者である事が藝術家の證しであると考えざるを得ない。

歐米の市民は經濟主義に徹し、民主主義といふメカニズムを通じてのみ政治に參與する。それ以外の所では、個人の生活においても、家庭の生活においても、また職場や社交においても、政治は話題にはなるが、積極的に政治に參與しようとはしない。同時に、政治をして個人、家庭、職場、社交の領域にまで立入らしめない様に努める。それこそ「政經分離」である。が、日本ではその分離が利かない。個人的、家庭的、職場的、社交的、その他のあらゆる不満と期待とが政治に懸けられる。經濟主義に對して、これを政治主義と名附けても良い。戦後に限らぬ、戦前も